

## 南仏、スペイン国境に近いピレネー山脈・山麓の日仏交流史にかかわる二つの墓

石田 純郎

医史学

The Two Tombs in Southern France of a French and a Japanese who Took Roles of  
Academic Knowledge Exchange between Japan and France

Sumio ISHIDA

(2004年11月10日受理)

明治維新、文明開化の際に日本へ及ぼしたフランスの影響は小さいと考えられている。南仏のスペイン国境に近いピレネー山脈と山麓に、近年、日仏交流史にかかわる二つの墓が、整備あるいは、再発見された。それについての現地調査を04年8月に行なった。一つはトゥールーズ南のマゼールのジャン・ポール・イシドル・ヴィダル (Jean Paul Isidore Vidal, 1830-1896) の墓で、明治6年(1873)から1年間、新潟医学教場(現 新潟大学医学部)で教鞭を執った医師である。彼自身の墓はなく、先に亡くなった妻の墓に合葬されていたが、昨年、日本医史学会の有志により、その上に、彼自身の日本語とフランス語で書かれた墓が、新たに付けられた。もう一つはペルピニャに近い温泉町 アメリーレバンで3年前に再発見された野村小三郎(1855-1876)の墓で、彼は岡山市東内山下(現在の岡山東税務署付近)に生れ、明治2年より大坂兵学寮で学び、翌年、日本人青年9名と共に、フランスで兵学を学ぶために留学したが、在仏6年で病死した。一般的には疎遠なフランスの、しかも僻地の日本にかかわる19世紀の二つの墓について報告する。

### 1、ヴィダルの墓

ジャン・ポール・イシドル・ヴィダル (Jean Paul Isidore Vidal, 1830-1896) は1830年2月21日に南仏オード (Aude) 県のサル・シュール・レルス (Salles sur L'hers) という人口600人の村で生まれた。

1848年にリール (Lille) 市で外科教育を受け、1853年にモンペリエ大学で内科医の資格を取得し、学位を得た。その後、フランス陸軍軍医として、ベトナムやアルジェリアに赴いた。1864年にはレジオン・ドノール勲章を授与され、1867年に陸軍軍医大尉の時、除隊した。

明治6年(1873)年1月に林 欽次の運営する東

京の迎義塾のフランス語教師となった。同年5月15日に新潟医学教場(現 新潟大学医学部)の最初の外国人教師として雇用され、化学から講義を開始し、新潟市で1年間教鞭を執った。その後、横浜に滞在し、明治7年(1874)7月から、群馬県富岡町の大蔵省租税寮富岡製糸工場の診療所医師として、働いた。明治10年(1877)から海軍省横須賀造船所の診療所医師として、明治17年4月27日まで勤務した。

その後帰国し、故郷のサル・シュール・レルスに居住し、オーグスチース・トルソー (Augustine Trousseau) と結婚した。1880年に17キロ南のマゼール (Mazeres) という町で開業した。

サル・シュール・レルスには先に開業医がいて、開業ができなかったためである。マゼールは早くも、13世紀に都市として成立し、パステルという植物系青色色素の生産で栄えたが、インディゴとの競争に破れ、衰退し、現在も人口3,000人と、過疎の町である。近隣の大都市トゥールーズからのバス便も、1日僅か2本、日曜日運休という現況である。

夫人は1887年2月6日に没し、ヴィダルは町北部の共同墓地に彼女の墓を作った。本人は15年間開業を続け、1896年1月1日に66歳で、マゼールで病没した（蒲原 宏著「ヴィダル、ヘーデンとフォック」『医学近代化と来日外国人』34-41頁、1988年、世界保健通信社）。

娘が一人いたが、疎遠であったようで、本人の墓は造られず、ヴィダルの遺体は夫人の墓に合葬された。ヴィダルの履歴については不明であったが、20年ほど前に、蒲原 宏と清水陽人の依頼により、現地のフランス人郷土史家が明らかにした。

上記の経緯によりヴィダルの墓碑は存在しなかったが、蒲原 宏、清水陽人、小林 晶らの働きにより、昨年、共同墓地の夫人の墓一墓を守る子孫がいなかったために、荒れ果てていたが、その墓の上に新たに設置された。日本からの原稿を元に、フランス人の技術者が、御影石に次のような日本語文とそれに対応するフランス語文を刻んだ。

一八七三年

新潟県初の西洋医学校を設立す  
日本人医師達より感謝の意を込めて

ICI REPOSE (ここに眠る)

Jean-Paul Isidore Vidal

21-02-1830 01-01-1896

(以下 日本文と同じ仏文略)

今回の訪問（8月16-17日）に当っては、現地在住のシャルル・セリーエ（Charles Serie）バスツール研究所名誉教授のお世話をいただいた。氏は、パリのバスツール研究所で研究職にあった後、現在、故郷マゼールでヴィダルの顕彰に関する業務を行っており、昨年、日本人3名が現地で墓の

開眼式を行なった際にも、現地で中心となって動いた。またセリーエ氏以外、ほとんどが英語を理解しないこの町で、日仏の通訳を現地日本人妻ポルシェ智子（Porsche Tomoko）氏にいただいた。また市庁舎では、市長主催の公式歓迎昼食会を、レストランでは、セリーエ氏主催の歓迎晩餐会を開催していただき、市の文化財保護委員、市立博物館・図書館長、地元新聞社記者などが、参加した。

ヴィダルの墓以外、国際的な史跡を持ち得ない現地の方々の並々ならぬ熱意を感じた。

## 2、野村小三郎の墓

地中海沿いのスペイン国境に近いフランスに、人口10万人のペルピニャ（Perpignan）という町がある。この町に居住してカタリーニア語の研究をしている小川三枝氏のもとに、2001年の夏、1本の電話がかかってきた。アメリーレバンの役場からで、当地在住のルネ・シャランコンさんというフランス人が、その地の墓地にある不詳の日本人の墓について調査を役場に依頼し、小川氏へ問い合わせがあったわけである。

アメリーレバン（Amelie les Bains）はピレネー山脈中の溪谷にある温泉町で、ペルピニャから1日に9本バスがあり、約1時間で到達できる。二つの溪谷が一つに合流している地点に開けた温泉町であり、岡山県の奥津温泉や湯原温泉の地形とよく似ている。

墓は正面立石に「大日本陸軍生 野村小三郎」、左側面に「明治九年十月二六日卒」とあり、水平面石にも、ほぼ同じ内容がフランス語で彫られている。役場の死亡証明書に「Bizeen Fouk-oka」と記載されていたことより、小川氏は西日本新聞社の協力を得て、この備前福岡は、現在の岡山県瀬戸内市福岡と同定した。

地元の役場が無縁のこの墓を整理したがっていることもあり、岡山市在住の日笠俊男氏と小川三枝氏は日仏野村小三郎学会を設立し、調査を開始した。野村小三郎に関する日本側の事跡は、日笠氏が国立公文書館をはじめ、あちこちで調査し、かなりの史実をすでに明らかにした。

野村小三郎は安政2年(1855)野村藤右衛門の子供として生れ、慶応2年(1866)年に没した父の家督を相続し、屋敷は東中山下、現在の岡山東税務署の辺りにあった。明治2年(1869)より大坂兵学寮の生徒として、フランス語を習う。明治3年(1870)11月27日、数え年16歳の時、大坂兵学寮のフランス人軍人教師 シャルル・ビュランの帰国に伴い、10名の兵学寮日本人生徒がフランスに留学したが、その中の一人である。翌年1月18日にマルセイユに到着した。

この20歳前後の留学生たちは、4名がフランスで続々病没した。氏名と没年月日を示す。シャルル・ビュラン：明治4年4月11日、前田杜馬：明治4年4月18日、戸次正三郎：明治5年11月25日、植崎頼三：明治8年2月17日、そして野村小三郎が明治9年6月26日。悲劇の青年留学生たちである。小三郎以外の病没者たちのフランスの墓も、小川氏らの調査で、続々、明らかになりつつある(『日仏野村小三郎学会 設立準備会誌』1～7号、2003年)。

死因はシャルル・ビュランだけはリウマチ性心内膜炎である。他の者は肺病と言われ、開放性結核を患っていた者がおり、それが行き先の狭い船室で、他の者に結核をうつした結果と想像される。

アメリーレバンにはフランス陸軍温泉病院があった。その歴史をまだ調べていないが、1850年頃開院し、1980年頃廃院になったと推定される。小三郎はそこで療養したのであろう。

現在、アメリーレバンに、大規模な陸軍温泉病院棟が残されている。役場から100m離れた場所に、町一番の教会があり、おそらくここで、野村小三郎の葬儀が催されたであろう。そこから5分程登ると墓地がある。墓地は上下2段に別れているが、

その下段に、野村小三郎の墓がある。

8月18-19日に、現地アメリーレバンで小三郎を巡る調査を行なった。ペルピニャから日帰りも可能であるが、あえて現地に宿泊し、時間をかえて、3度お墓にお参りした。水平石面に彫られた仏文は、浅く彫られていたので、従来、判読が不能であったが、朝、墓参りした際に、斜めに朝日が射していたので、浅く彫られた文字が浮き上がってきて、判読可能となった。

陸軍温泉病院、教会、墓地の相互位置関係も明らかになった。

まだ検索されていない小三郎や他の日本人留学生たちの史料が、パリの陸軍公文書館に保存されている可能性が高いので、調査しようとしたが、夏期閉館中であり、これは次回回しとなった。

ヴィダルの墓見学については、C. セリーエ氏、ボルシェ智子氏、小林 晶氏の、野村小三郎の墓見学については、日笠俊男氏、小川三枝氏の助力、助言を得た。ここに深謝する。

### 3、結語

明治以後の日本の近代化にあたり、一般的には、日本とフランスの関係は疎遠と考えられているが、フランスの、それもスペイン国境に近い辺境の地に、19世紀の日本とフランスとの医学、兵学の交流に貢献したフランス人と日本人の二つの墓が存在し、最近になって整備、あるいは再発見された。04年8月にそれを現地調査し、彼らの業績についての研究を深めて行く必要性を強く感じた。

### Summary

Two tombs in Southern France were renewed or rediscovered in these few years. One is a tomb of Jean Paul Isidore Vidal (1830-1896), in Mazeres, south of Toulouse. He worked as a medical teacher at Niigata Medical School from 1873 to 74. The other one is a tomb of Kosaburo Nomura (1855-1876), in Amelie les Bains, west of Perpignan. He was born in Okayama and studied military science and went to France to study in 1870, but he died 6 years later.